夢話・四
帰り道

大城拓人

Published by Takuto Oshiro
Copyright © 2010 Takuto Oshiro All right reserved.

帰り道

気持ちのいい、一点の曇りのない九月に入って最初の朝。
仕事帰りでへとへとになった僕は、いつも通りの時間、いつも通りの駅で僕はいつも通りの電車に乗り、空いている座席に腰を掛けた。
シルバーシートしか空いていなかったら、仕方なく立っているつもりだが、まだ本格ラッシュ時ではないこの時間は、大抵どれかの座席は空いている。
それでも込み始めたら、その席からも退くつもりだ。こんな僕でも、身の程ぐらいは弁えている。
だが、大体いつも、そんなに込む前に僕は下車してしまうのだが。

本当にキツい、夏場、この僕の仕事は本当にキツい。
サービス業も夜勤も、実を言えば僕の性には合っていないのだが、しかし、わがままを言える身分ではない。
今の僕は仕事を選べる立場ではない。
とにかく、僕はまだ当分、このまま働かなくてはならない。
何の為に、誰の為に？
誰の為と言えば、誰の為でもない、自分の為だ。
そう、何より、僕は今、自分の為に働いているのだ。
また一方で、これも鏡合わせの作用と言うべきか、汗水垂らして、今更ながら、僕は漸く親の有り難みというものが理解し掛けていた。
親に対して心から、素直に済まなく思う気持ちを、僕は抱きつつあった。
といっても多分、当の親からしてみれば、そんな気持ちは要らないだろうが。
それもわかっている。

流石に今日から新学期ということもあって、部活の朝練があるのだろうか、恐らく楽器が入っているのだろう、揃って小型のケースを肩に掛けた女子中学生と思われる女の子達が、四人、笑いながら乗車して来た。
彼女達は座ることなく、僕の座席の前に立ち、吊り革に手を掛け、電車が動き出しても、そのモーター音、振動音に抗うように、より鮮やかなトーンで談笑を続けた。
こういう無垢な若い声を聞いているのは決して嫌いではない。
どうやら彼女達は昨日の夜に放送していた人気バラエティ番組の怪談特集のことについて語らっているようだった。
あの首なし地蔵があるトンネルってさ、近くじゃん、マジやばくね？
やばい、あたし、あそこ何度か通ってるんだけど。
やばいよ、やばいよ、ミカ、お祓いしてもらったら？
お祓い！　超ウケる！　ああ、それよっかさ、あたし、びびったのがその次にやってた呪いのメアドの奴、超怖くね？
ああ、怖い怖い！　あたしも、超怖かった、あれ！　やばいっしょ！

体を斜めにし、窓に映る風景を眺める振りをしながらも、僕は、若いな、と心の中で呟いた。気付くと、僕の顔は綻んでいた。

十分としない内に、電車は僕が降りる駅に停車した。
女の子達は尚も賑やかに話している。ただしその話題は、もう既に流行の音楽のことに移ろっていた。
僕は彼女達の間をすっと素早く通り抜け、ドアが閉まらないうちに下車した。
自動改札のシャッターを抜け、駅の外に出ると、強くなり始めた陽の光に眼を顰めて、眠気を堪えて、僕は自分の「家」に向かった。
墓石が立ち並ぶ静かな霊園。
僕は自分の名字が刻まれた墓石に手を当てる。そしてその中に埋没して行き、祖父母、先祖達に対面した。いつも通り、彼らは温かく僕の労を労ってくれた。
こうして漸く、僕は眠りに就くことが出来る。
陽が墜ち、出勤時間が来る寸前までゆっくりと眠ろう。
親より先に死んだ者は、神に赦されるまで、生者達に戒めと娯楽を与える為の「バイト」をしなくてはならない。
この時期、心霊スポットでの仕事は極めてハードなのだ。

（終）